AJU コンビニハウス 会報

編　集/コンビニの会事務局
連絡先/〒452-0822 名古屋市西区中小田井 2-431
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人
コンビニの会

定価/150円
昭和54年8月1日第三種郵便物認可

第120号

麦秋に輝く麦畑の中で雲雀がさえずる

麦秋のころ

自然写真家　河嶋　秀直

この時期になると、家の周りが小麦色に染まる。毎年楽しみにしてる麦秋の時期。稲穂が黄金色に染まる秋と違い、麦穂は、この春から初夏に掛けて小麦色に染まり、「麦秋」と言われている。私は、今の町に暮らすまで、麦畑を見た事がなかった。もちろん「麦秋」という言葉すら知らなかった。今はというと、毎年この時期を心待ちにし、綺麗に麦秋を迎えた麦畑を見るのを楽しみにしている。そして、その景色をなんとか残したいと写真を撮り続けているが、未だに気に入るものは撮れていない。麦秋を迎えた麦畑の上をカサカサと乾いた音を立てて風が吹き抜けると、何故かとても心地よく感じる。

麦秋と時期を同じくして、雲雀の子育ても始まり、麦畑の上で囀っている。

雲雀は、賢い鳥で直接巣のある所には降りず、少し離れた所に降り立ち、歩いて巣に戻るという。外敵から巣を守るための知恵なのだろう。そういうささやかな営みを思いながら、麦秋を眺めるのが好きです。

(次頁へ)

日本には四季があり、四季折々の景色がある。そして、季節を彩る花たちがある。その花たちに逢いたくて早起きをし、花畑に出掛けている。花の命は短い、そして儚い、だから心に残るのかもしれない。

四季の中で、色々な花を見れることは、とっても贅沢なことです。世界で、これだけ多くの花たちを見れる国は少ない。昔から野辺に咲く花たちを詠み人たちは詩にしてきた。それほどまでに、花は生活の一部として景色の中に溶け込んでいた。花は見るだけでなく、匂いでも精神的に癒される効果が認められている。花生けの嗜みは無いが、一輪挿しに野で摘んだ花を生ける事もある。周りに仄かな暖か味と爽やかさが広がる。

今、花を撮る事が、ひとつのライフワークになっている。

蓮の花は朝の光を浴びて輝く

雑記
ごまめの歯ぎしり

桜まつり

4月の第一日曜日、我が町内恒例の桜まつりが今年も開催された。場所はすぐ近くの神社の境内である。お祭りのごちそうは手作りで町内の有志が前日から準備をする。私は串カツの担当で肉を細く切って串に刺すのだが、これがなかなか難しくて真っすぐに仕上がらない。ええい味で勝負だと形は勘弁願うことにする。

当日は朝から会場の準備だ。男性陣がテーブルと椅子を出して５０ほどの席とごちそう作りの場所を例年通りにセットする。桜まつりのチケットは町内の人は大人３００円、子供は１００円で手に入る。今年のごちそうは串カツ、焼きそば、ウインナソーセージ、みたらし団子、助六寿司、トン汁、桜餅で、お酒やジュースは飲み放題である。今年はうれしいことがあった。本職のたこ焼き屋さんがうちの町内に引っ越しされて来て、焼きそばを一手に引き受けて下さったのだ。毎年四苦八苦していた担当の方々は大助かりで、継続が危ぶまれていたこの桜まつりに明るい光が差した思いだ。

今年はもう一つうれしいニュースがあった。昨年は６０数名しかなかった参加者が今年は１００名近く集まったことだ。名城公園に近いこの地区も他所と同様に高齢化が激しい。毎年連れ立って参加されていたお年寄りたちが次々と鬼籍に入り人数の減少が続いていた。けれど空き家だらけだった我が家の周りにも新しい家が建って、子供さんのいる若い家族も越してこられた。桜まつりにも近年になく大勢の子供たちの姿があり、本当に楽しい集いになった。

ところで千葉県で4月に開園予定だった保育園が近隣住民の反対で開園を断念したというニュースを聞いた。他でも子供の声がうるさいと苦情があるので３メートルの高さの塀を築いたとか、ピアノを止めたとか聞くこともある。あの住民たちは自分の子供時代のことを忘れてしまったのだろうか。子育ての時期はどうだったのだろう。子供たちがいるからこそ未来に希望があるというのに。いつもそんな事を考えて悲しい気持ちにさせられる。

（会報委員　大島伊久代）

強度行動障害のある方の「願い」をどうつかむか―「困難を宝に」

岐阜大学　教育学部教授
別府　哲

昨年、エゼル福祉会で行った「行動援護従業者養成研修」の講師の一部を務めさせていただきました。その終了後、おいしいケーキとコーヒーをいただいていたところ、「ところで・・」とこの原稿を依頼されました。まとまったことは言えませんが、考えていることを少しだけ書かせていただきます。

昨年、全国障害者問題研究会出版部から「みぬまのチカラ―ねがいと困難を宝に」という本が出版されました。ご存じのように埼玉県のみぬま福祉会の運動と実践をまとめた本です。本の副題の「ねがい」を宝に、はうなずいて読みましたが、「困難」を宝にという言葉にはうならされました。取り組みが「困難」な運動、「困難」な実践（仲間）そのものが宝だという運動と実践は、読んだものに感動を引き起こす内容満載です。

今回はその実践の部分、特に強度行動障害と呼ばれる方の実践について紹介したいと思います。当初はとてもおとなしい、あまり目立たなかった政臣さんという方が、父親の死去、家の引っ越しなどをきっかけに、問題行動を頻発するようになります。水を飲みだしたらとまらない水中毒、睡眠が乱れ夜中も大声を出す、職員や仲間に手がでることなどです。ある時、施設の2階から突発的に飛び降り脚の骨を折ります。本来歩けないはずなのに、それでも病室から飛出ようとし、24時間体制で付き添わなければならないようになります。お母さんの言葉を借りれば、「政臣が壊れた」。その中で、職員も必死で対応しつつ、見通しがもてない苦しみの中に陥ります。

試行錯誤の中でいくつかの取り組みが始まります。詳細は本をお読みいただきたいと思いますが、私が強く印象に残ったことがあります。それは問題行動に対する取り組みです。問題行動が激しいほど、回りの人は「どうやって」それをなくすか、必死で考えます。それは当然のことなのですが、一方それが本人達の思いと裏腹にお互いを心理的に追い詰め、問題行動をさらに激化させることがあります。政臣さんの場合、水中毒を「なくそう」と迫ることが、隠れてトイレの水まで

飲もうとする事態を引き起こします。苦闘の中で職員は、「どうやって」無くすかの前に「なぜ」そうするのかを探ることに舵をきろうと決断します。発達検査も丁寧に行い、彼が、回りの人にいろんな気持ちがあることに気づく力がでてきたのに、その内容が十分わからない一歳半の節の前の特徴があるのでは?と考えます。この時期に入る前は、人の言葉も単なる音。だから聞き流せます。しかしこの時期になると、言葉にはその人の意図があることに気づく。一方言葉の具体的内容はわからないものが大半。だから聞き流せないのにわからない、わからないのに聞き流せない。不安がとても強くなると考えたのです。政臣さんもその不安の嵐を、水をとにかく飲むことで少しでもやわらげようとしたのかもしれません。そうとらえた職員は、理由は何であれ「水を飲みたい」のは彼の要求と考えます。しかし今の彼は「要求に支配」されている。彼が「要求の主人公」になれるような働きかけが必要では?と考えます。そこから「飲ませない」のではなく、「飲む質を高める」取り組みをしようとし、毎日お茶会を開き、おいしいコーヒーをいれながら皆で飲む取り組みを行います。試行錯誤はありつつ、「飲める」場が見通せることで彼はイライラが減っていきます。コーヒーを他の仲間に配るお仕事もやってもらう。それで仲間から「ありがとう」といわれる。そういった中で、一杯のコーヒーを楽しむ姿がみられるようになる。それと共に、むやみに水を飲む姿は減っていったそうです。

最近、医療現場でも水中毒に対し、飲むことの制限でなくどのように飲むのかを支援する立場があることを知りました（「多飲症・水中毒―ケアと治療の新機軸」医学書院）。問題行動が激しいほど、当事者も回りも問題行動に巻き込まれやすくなります。一方、障害のある方も一人の人間として喜び、苦しみ、いろんな願いや思いを持って生活しています。その「思い」をもう一度とらえ直すという、ある意味当たり前の（だからこそ、一番難しい）ことを、激しい問題行動を示す方は私たちにつきつけているのかもしれません。

「困難を宝に」。深く噛みしめたい言葉です。

子どもの頃は一日が長〜く感じられた。何故か、大人になるにつれて時間があっという間に過ぎるようになる。

仕事と子育てに追われた日々、朝が来たと思ったら・・・もう夕方、そんな日々がすごい速度で過ぎて行った。

子育てが一段落し、憧れの専業主婦になろうとしていたらレスパイトコンビニハウスのボランティア活動が始まった。時間はそれまで以上の速度で過ぎるようになり、「ちょっと、お腹がすいたなァ」と、時計を見ると午後三時を過ぎてしまっていることも度々だった。食事をするのも忘れるほど夢中になれる役割に出会えたことがとても幸せだったと思う。

あの頃、朝早くから夜遅くまで飛び歩いていた私に文句も言わずに（たま〜に嫌味を言っていたかな?）赦してくれた亡き夫にとても感謝している。

「やってみたい事を諦めずに選択する!」、「子育ての経験が他者の命を大切に思う心を豊かに育てる!」、「この道で学び続け、飛びっきりの専門家になる!」

みんな、みんな素敵な生き方だと思う。働き方の多様さを認め始めたエゼル福祉会。大切なことは、障害のあるエゼルの仲間たちと長〜く一緒に生きて行く職員が一人でも多くなることなのだと思う。

（エゼル福祉会　理事長　大川　美知子）

3人の職員が語る 働き方の選択

生活支援部　藤本　菜見

私は、この春から働き方を少し変えさせて頂くことになりました。その働き方とは、勤務時間を4分の3に短縮させてもらうというものです。仕事を短縮した時間で、やってみたいと思っていたことに挑戦しています。畑仕事をしたり、食材の事を学んだり、新たな分野の学びは新鮮でとても興味深いです。働き方をかえることになったきっかけとしては、ここ1年間、精神的に不安定な時期や、身体の調子を崩すことが多くあり、これから「どう生きていくか」を考えるようになったことがあります。どう生きるかを考えた時にわいてきた想いは、まずは幸せに生きていきたい。そして、自然と共にあるような暮らしをしたい…朝は太陽と共に目覚め、自分の作った作物を大切な人達と食べるような、自然のリズムにそった心が満たされる生活をしたいというものでした。そして野菜を育てたい、ハーブでお茶を作ってみたい、お菓子やパンを焼きたい…など新しく学んでみたいことがたくさん出てきました。

そんな想いの一方で、今まで築いてきた利用者さん達との繋がりは保っていきたいという気持ちもありました。しかし、今まで通

りに働きながら新しく学びも始めるような器用さは私にはありません。そんな気持ちを、上司に相談したところ時間を短縮して働く事を提案して頂き新たな働き方を選択するに至りました。

働き方を変える選択をするまでは、今ここでこの選択をして本当に大丈夫か、今までの働きがもったいないのではないか、等いろいろな考えが頭の中をぐるぐるとしていました。しかし、何を選択するにせよすべてはそこにいる自分次第で良くも悪くもなるのだなと思うようになりました。

外に出ていくことでしか、得ることのできない事があります。逆に同じ所にいることでしか得ることができないこともたくさんあります。どこで学ぶか選ぶのはその人次第。私はこれから、二つの場を行き来することになったので、それぞれの場所での経験を生かし、バランスを取りながら働くことができたらと思っています。

今後エゼル福祉会の中で、仕事とプライベートのバランスが変わること等、様々な理由によって多様な働き方をする人が増えていくでしょう。そんな時に、一人ひとりが選んだその人の決断・それぞれの働き方を尊重して認め合っていけたらいいなと思います。

藤本菜見さん(右) 利用者さんと盆踊り♪

通所部　大西　哲平

皆さんはじめまして。２月より通所部ＷＩＬＬで職員として働かせていただいています、大西　哲平と言います。

今回私がＷＩＬＬに転職を決めた理由、また同じような境遇の方はどのような観点で働く場を決めるのかというテーマを頂き、貴重なスペースをお借りして書かせていただくことになりました。

私は以前、グループホームで世話人という仕事に就いていました。生活支援の現場なので当然勤務時間が不規則で、早朝に出勤の日もあれば夜勤で夕方からという事も良くありました。そんな私が仕事を変えようと思ったのは新しく家族ができたことでした。子どもが産まれると分かり育児にも協力が必要だと感じ、お世話になった前職を離れる決断をしました。

そんな私が、ＷＩＬＬに転職を決めたポイントは３つでした。

１つ目は、基本的に朝から夕方まで。平日５日間という勤務体制。

２つ目は、実習をさせて頂きＷＩＬＬがどのような施設で利用者の方にどのような支援をしているのか。

3つ目に職場の雰囲気、環境はどうなのか。この3点でした。

私のように福祉施設から福祉施設への転職を希望されている人にとって大切なのは、給与、勤務等の待遇面はもちろんですが、それ以上に自分がこの施設で利用者の方を支援していくことが出来るのかという点がとても重要なのではないかと思っています。

中には全く新しい分野でチャレンジがしたいという人もいるでしょうが、多くは以前の施設と比べるところから始まるのだと思います。そこで最も重要になってくるのが、説明会よりも「実習」であると考えています。私は1日のみでしたが、人によっては2日～1週間と時間をかけて見たいと考えている方もいるのではないでしょうか。

職場の人間関係や残業、こういった点もやはり1日の実習では見えない部分もあります。また転職者は職探しに慎重になっているところもあるので、分からなかったからここはやめようと思う人も少なくはないはずです。

福祉施設の現場は続けていくことで入職当初とは身体的、精神的な辛さや、自分のしたい支援の理想と現実など少なからずギャップを感じる場だと思います。それは前職も福祉施設に勤めていた人ならきっとある程度分かっていると思います。そんな中で実習のプログラムを通して厳しさや難しそうなこと、楽しいこと、やりがいを事前に見つけることができ、知った上で入職が出来ると、施設にとっても就職を決めた人にとってもプラス面が多い結果になっていくのではないかと考えています。

私は早く新しい仕事に就きたいと言う思いもありましたが、WILLの明るい雰囲気、仲間に対する職員の皆さんの接し方をみてこの施設なら自分が学ぶこともでき、やりがいや楽しさを感じながら続けていけると思い採用試験を受けました。

今後もWILLで自分に何が出来るのかという事を日々考えながら、楽しく健康に頑張りたいと思います。

大西哲平さん

通所部　溝口　愛

前身のNPO法人の頃から含めると、私がエゼルに勤めてちょうど10年が経ちました。学生の頃からアルバイトヘルパーとしてコンビニハウスには関わっていましたが、私は特別積極性のある学生ではありませんでしたし、障害をもっている人が大好きとか興味があるというわけでもありませんでした。そんな私がなぜ続けてこられたのか…？ それは、障害のある人たちのもつ葛藤や苦しみ、その裏にある願いに気づき、「私も同じだ」

と気づいたことが大きな理由であると思います。

「たくさん楽しいことがしたい」「人の役に立ちたい」など、今の自分に比べて「こうなりたい」という願いをもつことは障害の有無にかかわらず全ての人に共通する当たり前の欲求だと思います。しかし、障害故にそれをうまく伝えられなかったり、周りの空気や雰囲気を敏感に感じ取り、その欲求を表に出すことをためらってしまう人がほとんどです。彼ら彼女らの、悩んだり精一杯伝えている姿に「そのままのあなたでいいんだよ、大丈夫。」と言いながら、同時に自分自身も励まされ救われてきたのだと思います。

また、職場の人間関係にも恵まれていました。決して器用とは言えず、職員としての成長もゆっくりだった私を優しく見守ってくれた当時の施設長をはじめ、何かある度に共に悩み考えてくれる同僚の存在にも助けられてきました。責任の重さに押しつぶされそうになったことも何度もありますが、自分に与えられた役割があり、ここにいる意味を感じられたことがやりがいにもなってきました。

今、法人全体で職員が働き続けられる環境づくりや育成方法が大きな課題になっています。私の入職当時と比べると職員数も増え、構成もずいぶんと変わってきました。アルバイトをしていた学生が職員になるという新卒採用が殆どだった当時に比べ、今は他職種での経験を持つ中途採用の職員も多くいます。また、既婚者も増え、子育てをしながら働いている人も増えてきました。こういった変化は新しい価値観が職場にもたらされるきっかけにもなり、とても喜ばしい事だと思います。仕事に求めるものも人それぞれ違いがあるでしょう。仕事にかける比重も人それぞれで、どれが正しいということもないのだと思います。大事なのは、職員自身もこの場でそれぞれのもっている力を発揮し合えるか?そのような環境や関係性をつくっていくことができるか?という事だと思います。

無我夢中で目の前の仲間と向き合うことやお互いを知っていくこと自体が目的だった当時に比べ、不十分ながらも活動も一定形づくられてきて、ともすれば毎日を「過ごす」ことに慣れてしまい、何の為にしているのか?を見失ってしまいがちです。毎日の積み重ねの先に目指しているものは何か?仲間一人ひとりの願いはどんなものか?仲間を中心に、語り合い共有し合う時間を意識的につくりだしていく必要があると思います。その中で私たちに求められていること、今できること、課題となることは何なのか?職員一人ひとりと丁寧に確認し合っていきたいです。

溝口 愛さん

会報をお読みいただいている皆さまへ

青空に木々の緑が眩しい季節になりました。日頃、皆様方にはコンビニの会、エゼル福祉会の活動をご支援いただき感謝しております。

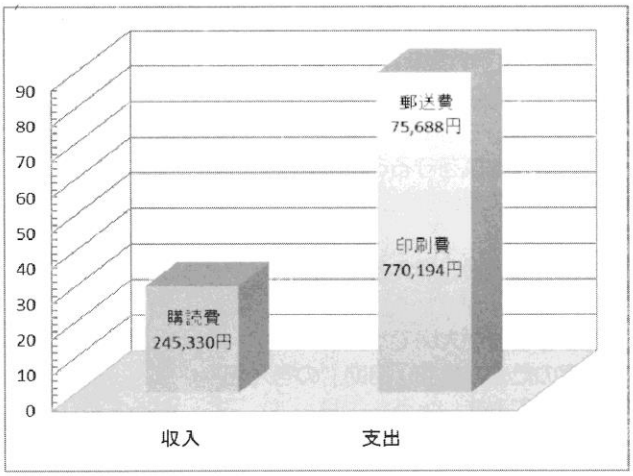
このところ、保育所の待機児童問題やこどもや老人の貧困問題などが社会の注目を集めています。家族の機能低下を社会でカバーする仕組みづくりが求められ、制度と困っている人をつなぐ社会福祉法人やＮＰＯの責任はますます重くなると実感しています。

会報では読者の皆様に少しでも障害者を取り巻く制度や生活の様子に関心を持っていただけるような記事を掲載したいと思っています。障害当事者、家族、研究者、職員などいろいろな立場からの発信をしていくつもりです。また、今年度は後半から中小田井の建て替えについて、さまざまなニーズを掬い上げ実現に向けて取り掛かる予定です。

障害者が安心して暮らせることは皆さまにとっても暮らしやすい社会になることだと思います。このような形での会報発行にご理解いただけましたら、会報作成費の捻出にご協力ください。趣旨をご理解いただける方のみで結構です。強制ではございませんので、ご承知ください。

特定非営利活動法人コンビニの会　理事　宮川優子

平成 27 年度　会報購読料の収入と支出



《活動状況》

3月

2日　自立支援連絡協議会施設部会　（若林）
5日　全障研愛知支部東海ブロック集会
　in あいち（寺澤・溝口・増田・久野・浅野）
6日　ヘルパー学習会・送る会
12日　理事会・評議員会
18-19日　発達保障研究集会（埼玉）　（世古）
22日　会報発送
24-25日　名古屋市集団指導
　（渥美・榊原・溝口・麻生・牧野・水谷）
24日　ＷＩＬＬ親の会
29日　自立支援連絡協議会施設部会　講演会
　「障害者差別解消法について」　（若林）
　会報会議
31日　ＷＩＬＬ防災訓練

4月

1日　新入職員オリエンテーション
　（稲垣・峯・大西・坪内・水野）
3日　ヘルパー学習会
7日　名古屋生活支援事業所連絡会
　事務局会議　（大川）
15日　あいされん運営委員会・情勢学習会
　（榊原）
17日　全障研愛知支部　春ののびのび講座
　（水野・稲垣・峯）
21日　暮らしの場交流会　（北原）
24日　愛障協学習会
　（寺澤・溝口・増田・有満・佐藤・大西・渥美）
28日　ＷＩＬＬ親の会
30日　同朋大学学内企業展　（麻生）
　マイナビ法人説明会・見学会
　（麻生・藤本）

～ 災害ミニ情報（自助・共助・公助について） ～

- **「自助」**とは、自分の身は自分で守ることです。
  避難する場所の確認や、飲食料の備蓄など事前に準備しておきましょう。
- **「共助」**とは、地域は近所で助け合うことです。
  災害発生直後に、一番頼りになるのは地域の力です。
  防災訓練や行事を通して日頃から地域の協力体制を築いておきましょう。
- **「公助」**とは、行政が地域を守ることです。
  災害に強い街づくりや情報提供などを行います。

災害による被害を最小限に抑えるためには
「自助・共助・公助」が
それぞれ連携することが大切です。
いざというときのため、まず「自助」の考えを
念頭に備えを始めてみましょう。

事務局コーナー

「ご協力ありがとうございました」

3月～4月（敬称略・順不同）

★　ご寄付いただいた方々

(NPO法人コンビニの会)

※会報購読料1万円以上お振込みの方

アイ　トクメイ

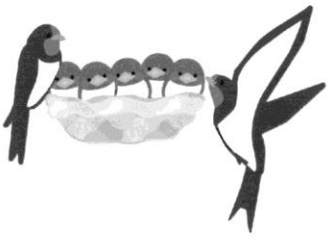
★　物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

森島千絵・藤村亜子・塩澤しのか
桑原諸彰・谷口　創・宮田まどか
渥美匡史

(ＷＩＬＬ)

丹羽恵子・塩澤しのか・朝比奈幸生
古澤亜希・近藤愛季実・梅村　勝
松井彩斗



★　活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

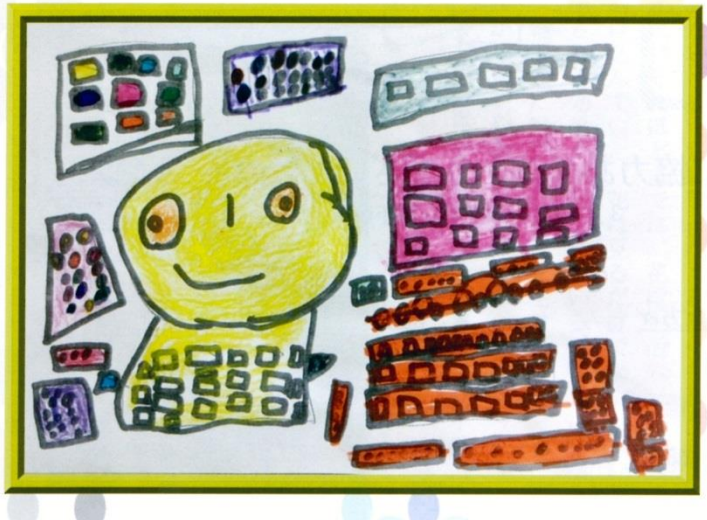
伊奈晶子　石原正寅　青木政治　加藤　結
辻本道子　桑原諸彰　黒田隆広　林　和子
高塚朱美　辻本有沙　藤村亜子　酒井まみ子
河合尚武　小川阿弓　山崎直人　寺田みどり
楠村ゆき　竹内恵子　辻本有沙　稲垣ゆき奈
東原光江　田口陽介　加藤礼菜　石原まち
森島千絵　峯　彩奈　梶原　亮　赤坂美登里
寺西　剛　土田京加　星野恭兵　三浦結梨恵
加藤志歩　安藤沙恵　松井彩斗　北島ゆり香
鷲見澄世　曽我直子　幅　琢真　小林ほのか
佐々木久美子

(ＷＩＬＬ)

武部　文　梶田明宏　須田たみ子
梅村　勝　松井彩斗

★　会報発送ボランティア

佐藤美紀子　半田素子
吉田嘉子　　高松陽子



「ぼくの街」

信号機やマンション、
電車がある僕の街
明るい楽しい愉快な街

銀行口座
三菱東京 UFJ 銀行　小田井支店　店番 238　(普) 口座番号 1440108
特定非営利活動法人　コンビニの会
郵便振替口座　番号　００８００－２－３５１９０　　コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。〒452-0822　名古屋市西区中小田井 2-431
障害のある人たちの地域生活を支援する
特定非営利活動法人
コンビニの会
理 事　宮川　優子
コンビニハウス　Tel (052) 502-7731
Fax (052) 505-6082
ＵＲＬ　http://ezeru.sakura.ne.jp/
E-mail　convini@beach.ocn.ne.jp

発行所：東海身体障害者団体定期刊行物協会　名古屋市中区丸の内 3-6-43　みこころセンター4 階